

# NPO法人「<sup>えい</sup>穎娃<sup>い</sup>おこそ会」の取り組み

## ～地域資源の産業資源化のヒント～

### はじめに

当研究所は毎年長崎県、大分県、宮崎県、鹿児島県のシンクタンクと連携を取り、現地取材を行うミーティングツアーに参加している。今回は2019年1月に訪問した鹿児島県南九州市<sup>えい</sup>穎娃町のNPO法人「<sup>えい</sup>穎娃おこそ会」(以下、「おこそ会」)の事例を紹介する。

### 1 南九州市<sup>えい</sup>穎娃町とNPO法人「<sup>えい</sup>穎娃おこそ会」の概要

- <sup>えい</sup>穎娃町は、指宿市や南九州市知覧町の2大観光地に隣接するも観光客が立ち寄ることが少ない地域であった。
- 2005年に始まった町おこし活動をきっかけに、<sup>えい</sup>穎娃町は観光通過点から多くの観光客が訪れる地域へと変容した。その変容をきっかけにUターン者、Iターン者が増え始めており、町の活力は回復基調にある。

#### (1) 南九州市<sup>えい</sup>穎娃町について

南九州市<sup>えい</sup>穎娃町は薩摩半島南岸に位置する。指宿市、南九州市知覧町の2大観光地に隣接するも<sup>えい</sup>穎娃町を訪れる観光客は少なく、「おこそ会」が発足する2000年代前半までは町民の観光に対する関心は薄かった。1950年の2万9千人をピークに町の人口は減少し、町内の後継者不足などから小売店の廃業が相次ぎ、町の活力は失われていった。

#### (2) 「おこそ会」について

町の将来に危機感を持った地元の商工会や観光協会の有志が中心となり、町おこし活動を専門的に行う「おこそ会」を設立した。「おこそ会」は地域資源を活用した様々な町おこし活動を行い、<sup>えい</sup>穎娃町を観光客が訪れる観光地へと変容させた。また町の変容をきっかけに町内事業者の事業後継者のUターンやIターン者が増え始めており、町の活力は回復基調にある。

次項より「おこそ会」の主な取組を紹介する。

穎娃町、「おこそ会」の歴史	
1889年	穎娃村発足
1950年	穎娃町へ町制移行 人口ピーク(2万9千人)
2005年	任意団体穎娃おこそ会発足
2007年	穎娃おこそ会NPO法人移行 3町合併により南九州市発足
2010年	<sup>ばんごころのはな</sup> 番所鼻自然公園 整備開始 <sup>かまぶた</sup> 金蓋神社周辺の周遊マップ作成
2012年	<sup>おおのだけ</sup> 大野岳再整備 茶寿階段完成
2014年	石垣商店街空き家再生着手
2018年	総務省ふるさとづくり大賞 総理大臣賞受賞



## 2 「おこそ会」の主な取り組み

- 地域の観光資源を掘り起こし、それぞれにストーリー性を持たせることで、観光資源を磨き魅力を高めた。
- 核となる3つの観光スポットごとにテーマを付与し、全て回れば「一生幸せになれる」として、観光に周遊性を持たせる仕掛けを構築した。
- 石垣商店街では7軒の古民家再生を行った。再生された古民家は民宿、ゲストハウスなどに利用されており、新たな観光スポット、宿泊地となっている。

### (1) 地域資源の魅力高め交流人口を生み出す

#### ① 番所 鼻自然公園～新事業開業をきっかけとした観光地化

Iターン者が公園内に全国唯一のタツノオトシゴの観光養殖場を開業したことをきっかけに、「おこそ会」メンバーが手作りのタツノオトシゴに因んだ幸せの鐘「吉鐘」を設置した。タツノオトシゴの産卵シーンはハートの形になることから、夫婦円満や子宝、安産にご利益があるとして新たな観光スポットとなった。



吉鐘 設置作業 完成後



おこそ会  
加藤氏

「吉鐘」の設置をきっかけに行政も動きだし、遊歩道など公園整備が進みました。その後「おこそ会」は看板設置、イベント企画などに行い、観光客の増加につなげていきました。番所鼻自然公園の成功体験は他の町おこし活動に繋がっていきました。

#### ② 釜蓋神社～パワースポットの観光拠点化

武の神様が祀られている同神社では鳥居から社殿まで釜の蓋を頭にのせて願掛けすると勝負事などの願いが叶うと言われている。

2010年頃からパワースポットブームがおこり同神社の参拝客が徐々に増え始めた。そこで「おこそ会」は番所鼻自然公園との周遊マップ作成や日曜朝市の開催、観光ボランティア組織の立ち上げを主導するなど観光資源を磨いていった。

その後ロンドンオリンピックで銀メダルを獲得したなでしこジャパンの主力選手が大会前に参拝したことがマスコミに取り上げられたことで一気に知名度が高まり、同神社の年間参拝客は2010年の1万人から2014年の15万人と大きく増加した。



釜蓋神社



おこそ会  
加藤氏

観光客が増加したのは、周遊マップの作成や朝市の開催など地元住民の地道な活動が実ったものと考えます。その後釜蓋神社は指宿、知覧の周遊コースの一つとして紹介されるなど、薩摩半島南部有数の観光拠点に成長しました。

③大野岳～地元農業を観光資源化

「茶」の文字は「十」、「十」、「八十八」に分かれ、その合計は「108」となる。お茶の生産が盛んな大野岳周辺の茶農家のアイデアから、大野岳に長寿を願う108段の「茶寿階段」が整備され、颯娃町の新たな観光スポットとなった。

そのほか大野岳周辺の茶農家がお茶摘み体験ツアーを企画するなど、お茶をテーマにした観光地化を進めている。



茶寿階段



おこそ会  
加藤氏

「家族の幸せ」の**ばんどころのはな** 番所 鼻自然公園、「仕事の成功」の**かまぶた** 釜蓋神社、「長寿」の大野岳。この3カ所を回ることを「三寿めぐり」と名付け、3カ所回れば一生幸せになれるとしてPRしました。3カ所回ること町内の周遊性が高まりました。

(2)空き家を活用し観光客の滞在時間を伸ばす

「おこそ会」は颯娃町の中心部・石垣商店街付近の利用されていない古民家、旧店舗の再生事業に取り組み、7軒の空き家を再生した。

空き家改装作業については、「おこそ会」のメンバーがDIYで行ったほか、颯娃高校生や鹿児島県内の大学生が実習の一環で改装作業に携わるなど、費用を極力抑える工夫をした。改装作業に参加する地域住民も多く、空き家再生は地域の楽しみの一つとなっている。これらの空き家再生過程の視察を目的とした観光客も増えており、同事業は町の新たな観光資源となった。

改装された物件は民宿、ゲストハウス等として観光客を迎え入れる宿泊場所として利用されており、「三寿めぐり」に加わる新たな観光スポットや宿泊地として町内の周遊性を高めている。

また改装物件の管理・運営にIターン者が携わるなど、石垣商店街は空き家再生をきっかけに新たに観光ビジネスを始めたいと希望する若者を引き寄せている。



民宿として生まれ変わった古民家



おこそ会  
加藤氏

颯娃町に興味をもち移住を希望する人が増えていますが、移住者を受け入れる住居が不足しています。今後も地域住民と一緒に楽しみながら空き家再生物件を増やし、石垣商店街の再生につなげていきたいと思ひます。

### 3 「おこそ会」からの学び

- Iターン者や地域おこし協力隊のメンバーなど、“よそ者”の視点を取り入れることで地域資源の魅力を高めている。
- 補助金等に頼らず、自分たちのことは自分たちの手で行う“自立の精神”が活動の持続可能性を高めている。

#### (1) 「よそ者」が活躍できる風土

「おこそ会」の活動では、Iターン者や地域おこし協力隊のメンバーが主要事業のプロジェクトリーダーとして、地元の住民が気付かなかった地域資源を「掘り起こし」、「磨き」、颯娃町を観光の町に変容させていった。

「よそ者」の価値観を認める寛容さが組織に活力を生みだしている。

#### (2) D I Y⇒創意工夫が生まれる

「おこそ会」はまちづくりの活動を持続させるため、D I Yを駆使するなど低予算で行政からの補助金に頼らない運営を心掛けている。

メンバー自身の手で作ることが事業に創意工夫と愛着が生まれ、携わるメンバーの満足感と新たなまちづくりの意欲に繋がっている。

#### (3) メンバーが「楽しい」と感じる事業の実施

「おこそ会」はプロジェクト形式で新しい活動に取り組んでおり、メンバー自身が「楽しい」と感じる事業を実行してきた。地域資源に着目した「遊び心」が様々なアイデアを生み、地元住民を巻き込みながら町の活力に繋がっている。

- 「おこそ会」はまちおこし活動を通じて、眠っていた地域資源の利用価値を見直し、魅力を高め、ストーリー性を持たせるなど颯娃町を観光地化していった。
- 身近な地域資源を活用する「おこそ会」の事例は、県内でも大いに参考になると考える。